

金融機関・税理士との三位一体で 建設現場のあらゆるシーンを全力サポート

企業がポストコロナを生き抜くためには、社長が資金繰りの憂いなく経営に没頭できる体制が必要だ。金融機関、税理士との三位一体の実現で、成長を続けるACデザインは、まさにその好例である。

建設（土木）現場の現場監督を支援する独特のビジネスモデルで2005年創業以来、成長を続けるACデザイン。社長の三上哲也氏は、自らも建設会社で現場監督を15年つとめ、独立後はそのノウハウを生かしつつ、仲間である現場監督たちの困りごとをサポートしてきた。三上社長は言う。

「現場監督は数多くの仕事を同時並行でこなさなければならない過酷な職業です。進捗管理や予算管理はもちろん、役所や周辺住民への対応もある。頭がぐちゃぐちゃになりながら、仕事を進めていかなければなりません。そうした現場監督をあらゆる面からサポートするのが当社の役割です」

現場監督のニーズを満たす

三上社長は、若いころから「何としても社長になりたい」との希望を持ち続けてきた。二十歳のと



三上哲也社長

きにこの業界に入り、現場監督になるも常に独立の機会を狙ってアテンテをはっていた。そうしたなか、2002年、岩木川にかかる岩木黄橋の建設という大規模工事をやり遂げた際、三上社長の気持ちをのなかでひとつの区切りがつく。「満足してしまっ、次のステップへと進みたくなったのです。さ

らに、ちょうどそのころCADと出会ったのが大きかった。当時、現場監督でCADを使える人はいませんでしたが、私がいち早く手に入れて操作しているうちに、こんなこともあんなこともできると、どんどん夢中になって……」

タイミングで会社をやめ、仲間の現場監督相手にCAD講習会を始める。これが評判となり、「凶面を描いてほしい」という依頼が殺到。一人では間に合わず、CADを扱える人を雇って対応するうちに、それ以外のさまざまな仕事の支援も求められるようになる。もともと現場監督の三上社長にとって、顧客は仲間。悩みやニーズは理解できるし、要望にはできる限り応えたいという思いもあった。

たとえば人材派遣事業。土木現場は数限りない仕事の連鎖であり、そこにスキルを持つ人材を臨機応変に派遣できれば、現場としてはこんなありがたいことはない。同社の人材派遣は、「国の公共事業にはおおむね2人の一級土木施工管理技士が付きませんが、3人目の技術者としてACデザインから技術者が派遣されるというイメージ」だと三上社長は言う。

さらに、測量は免許を取得して請け負える体制を整え、積算もソフトを導入して全社的にスキルを磨き、引き合いを増やしている。

「役所からもらう図面は机上のものなので、工事が進捗するにつれてさまざまな条件が加わり、変更が必要になってきます。その際にやっかいなのが数量計算書の作成で、生コンや型枠などの資材をどこにどれくらい使うのか計算する必要があるので、この作業をACデザインの設計部隊が乗り込んで請け負ったりもしています」
(三上社長)

加えて現在、同社が力を入れているのがCIMだ。CIMとは情報通信技術（ICT）を使い設計段階から3次元モデルを導入し、施工現場を早い段階で可視化。関係者間の情報共有を実現して協議の迅速化や施工管理の効率化を行うもの。建築分野では「BIM」と呼ばれているが、そのいわば「土木版」だ。ACデザインでは、このCIMを可能にする設備投資とノウハウの蓄積を行い、すでに現場での運用を開始している。

顧問税理士の伴走支援

こうして創業以来、成長軌道を



薬師山正人税理士 みちのく銀行堅田支店 長谷川裕也代理 みちのく銀行堅田支店 大高正敏支店長 三上伸子総務部長

描いてきたACデザインだが、その道のりは決して順風満帆だったわけではない。現場サイドが欲しいものを提供していくうちに社員が増えていき、パソコンやシステムなどの設備投資もかさむにつれ資金に余裕がなくなることも珍しくなかった。

三上社長の経営者としての歩みを支えてきた妻の伸子さんは言う。「現場のニーズに合わせるべくスキルの高い人を雇うことで、業種の幅がひろがったのはよいのですが、その分運転資金がかさみ年末に給料の支払いに困るようなこともありました。そんなとき助けていたのが薬師山先生とみちのく銀行さんでした。運転資金にしても設備投資にしても、何かあったらまずは薬師山先生に相談し、そして、みちのく銀行さんに融資をお願いするというスタイルで、会社をつないできました」

創業時からの税務顧問を務めている薬師山正人税理士は、同社に伴走しつつ三上社長の経営者としての奮闘を見てきた。

薬師山税理士が述懐する。

「当初から三上社長は革新的かつ柔軟でした。フットワークも非常に軽く、私もそういうところがあ

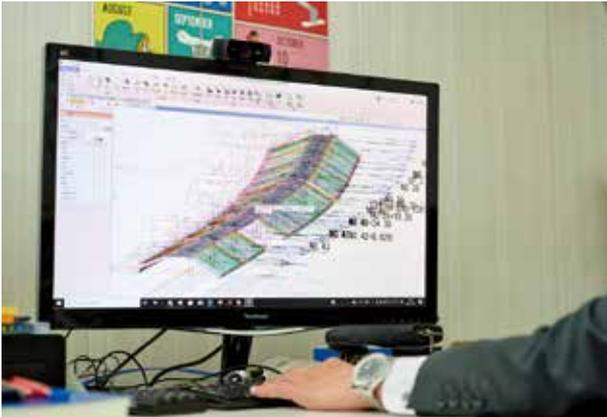
るのでウマが合ったと言いましうか……。社長も奥さんも勉強熱心かつ好奇心旺盛で、私も次第に引き込まれていきました。経理面でのシステムやサービスの導入を提案しても、すぐさま首肯されるなど、専門外の分野でも業務の効率化やデジタル化に熱心という印象です」

創業後、3年して法人なりしたACデザインは、TKCの会計システム『FX2』を導入。薬師山税理士による巡回監査、月次決算の体制を整え、『継続MAS』による経営計画の策定にも取り組んだ。財務の透明化、経理データの把握の迅速化を進め、そのことによりメインバンクであるみちのく銀行からの信頼も獲得していく。

なかでも転機となったのが、2017年のTKCモニタリング情報サービス（MIS）の導入である。MISは、税務署へ電子申告を行うと同時に、同じ決算書が金融機関にオンラインで提供されるサービスだ。

みちのく銀行堅田支店の大高正敏支店長は言う。

「ACデザインさまは、設立当時から当行をメインバンクとして活用いただいていたのですが、とくに



ICT技術を駆使して建設現場を可視化する

MISをご利用になって以降、より親密な関係性を築けていると思います。MISは電子申告と同じ財務諸表が、同時にわれわれのところにも届くので信頼感があるし、しかもそれが薬師山先生の事務所から送られてくるということで、間違いのないデータだと確信できます」

MISで銀行との親密度向上

MISには、決算書を提供するサービスとともに、月次試算表を提供するサービスもあり、ACデザインでは、両方とも導入している。そのため、みちのく銀行では、

同社の月次の数字も常に把握している。同行堅田支店で、同社を担当する長谷川裕也氏は言う。

「コロナ禍の時代はとくに、情報を早くいただけるのはありがたいし、こちらもタイムリーに提案をできるというメリットがあります。また、状況に併せた最適な情報を提供できる。コロナ禍に入ってから、ACデザインさまの資金繰り活用できそうなさまざまな融資制度や支援制度を含めて提案させていただきました。それも会社の内情を常に把握できているという状況があるからだと思えます」

ACデザインでは、みちのく銀行

行によるいわゆるゼロゼロ融資（実質無利子無担保融資）を受けている。とくに資金繰りがひっ迫しているという状況ではないが、不透明な先行きに対する専守防衛という意味合いだ。ゼロゼロ融資には定期的なモニタリング報告が求められるが、MISの月次試算表提供サービスを利用していれば、それも難なくクリアできる。

三上社長は言う。

「うちは隠すものは何もありませんし、薬師山先生による巡回監査・月次決算や経営計画策定、MISの利用によって、みちのく銀行さんとの関係性もどんどんよく

なっています。妻が述べたように、創業してしばらくは、大変な時期もありましたが、最近は精神的にも安心感が出てきて、業務に集中できるようになったのは、この関係性によるところが大きいのだと思います」

さて、今後のACデザインはどうか。「施工現場のあらゆる要望に応える」というオンリーワンのビジネスモデルを駆使しつつ、CIMという有望分野への参入で将来的な飛躍も十分に期待できる。

「現場サイドが利益を出すのに一番良い方法は、施工を早く終わらせることなんです。われわれはそのための提案をしていく。そうすると、仲間の現場監督の評価が上がり、給料も上がる。結果としてわれわれの仕事も増えるという好循環になるわけです」

インフラ事業は、今後も減ることはないし、事業者にとって効率化は永遠のテーマなので、景気が良くて悪くても同社の仕事は増えていくことになる。それを側面から、薬師山税理士とみちのく銀行が手厚くサポートしていく。理想的な「三位一体」が形作られつつあるといえよう。

COMPANY DATA

ACデザイン株式会社

創業 2005年11月
所在地 青森県弘前市大字賀田1-3-5
売上高 2億4000万円
社員数 24名



薬師山正人税理士事務所
所長 薬師山正人
青森県弘前市大字萱町 50-1

